繪本豐臣勲功記

初編

五

繪本豐臣勲功記初編卷之五

目録

木下反間謀讖ニ山口通忠
附 戸部我死
山口左馬助悔ニ戸部强上
附 北畠叛軍

豊臣記初編巻之五

江戸　櫻澤堂山　編輯

豊臣勲功記

木下反間謀識山口逆意　附戸部戰死

韜略の所為虛あり實あり。敵の謀事を顧慮る。响ハ艸木風ふ動くを生ぜ心猜り事ふこと。外ひとふ森三左衛門可成ハ勇を行商ふ扮せ。笠ヶ戸部作ハ笑るハ智多郡ふあるはしをりハ斗をへぐにより是古今の和遂の秋の扶寨あり。戸部新左衛門ハ書物を見め古来ハ智多ふ属るの秋一里得。織田殿ふ生るふ。信長られを筆者ふ命じ。密ふ戸部ハ書相を念通ぜ々々ふ夢ゆせるるふ日を累ねられを書ゆし。一點一畫偽筆と見へねば。信長文句を口寫ふ。一封の書を記得させう。ム文面の卦ハ戸部新左衛門出ん遊既ふ織田家へ為擔ふ心ふ政を

懐かしがれども山に父子の情始より。今川義元の幕屬なれど借ふ
織田家へ仮の相図。子息九郎次郎を清洲へ投ず。城中の蹠
蹠を伺ふ。情く地ふ義元へ通せんかゝるあふ少べ。努くは間諜有
べゝ決。外いの人自方の対策ふ。用ゆる所ゆ有られべ。皆く来安主一
ひべし。倘機会あらば左馬助を。笠ゆ招ゆの。密ふ籌へ酒燕を
催ふし。其席ふして敵捉べし。外られば智ゆの郡中ふ。城を也る
護ゆを備ふい預計。御自方ゝゝ及くいゆを。縱令義元当国へ
大軍を率ひ攻入とも。更ふ怠る所也。拙者の討議を構へと。
今皆くれひべ。渠ふ察られ王ゆるゆうはを紀りひ。と真面
相ふ記得ゝ。當名い織田家の家老職宋田雅六佐久間右衛
つへ戸部新左衛つよを賜る文章ゆり。拙密翰ふ亦一封の山口九

郎次郎が密書を添ゝ是い山口九郎次郎よを又左ゆ助へ言勝
る書簡ゆを。ちの文面ふ徴ゆる意い拙夜情ふ新左衛つが密書を
量ゝゝ奪取。遣ちを倅ふ記得ゝ又ゆ新左衛つが書簡をべ。
恭しく革鞄ふ納。封目細密ふ封を綴ゆを。藤吉郎ふ命ぜられ
山にが使者ふ扮せ。直地ふ向る海へ遣しゝを爰吉原来速歩ゝ
妙を切へあるられば一時ふ来過其内ふ彼城ふ到を。左ゆ助ふ遮ゆ
ゝゝ。山に執をのどをげふ。ゆゝ九郎次郎が書簡を閲終ゝ。次ふ革
鞄の口を解。始終を見るよりも。五分へ発ゆ怒ゆ密書を撲
地と抛着へ。惜き新左衛つが所為よる。天地ふ笑ゝ記君恩を忘ゆ
へ織田ふ荷擔ちることを。ゆゝ腸断し。外ゆゝゝ今拙密書吾
子が為しこを大音ゆれ。先九郎次郎へ返書を遣らんと意中密こと

書記得。藤吉郎に是を潜按し。我身の病悩あしかれど。不日に全
快なべかれば。父が事を気煩なせそ身が用ひをやめにせよと言傳へよ。亦
汝ハ辛苦の使大儀なり。と労ひたるれば藤吉郎。承て暇を告ちや
くも清洲へ走返て主君に斯と言状しければ。織田殿大に悦び。且ひ
来日山口戸部が中間より起ると窺ひ。猶に果して山口なる助戸部
が書簡を実と信じ。おのれ逆賊謀さも悪し。殊に咱なるらんとぞ。
讒懐ま極と憤怒ぬ。這奴行時も捨置るれど。と直に發別へあるを
来り。主人義元へ注伸しけるに。義元も又大に怒を発られを孔
しもせず戸部を誅戮なべき也。たる助へ命じつりしは塞しかりなる
奴ども有り。山に路やりと羽を巧ませ。小夫織田へ攻隙せしも悉る
変事を窺在て。御前へ注伸せんが為なり。然からへバ子息をバ。

清洲に置こと安からず。急ぎ九郎次郎を呼戻し。親子一隊に
力を勠せ戸部を殴捕めにすべし。と怒気を帯て言状なされバ義元
それハ右も左も。宜に計ひめにすべし。と課せ山口歓起蝗めにしく
鳴海へ還り。所利なる駅卒をあつらく。清洲にありける子息が許へ。
速時に退去し来るべしと密書を齎せて遣しつ。然るに此日
清洲にハ。預く木下が計策を。その門の出入最厳しく。卒忽に往来
称えざりしが。寸虚を見澄し城内。へ入らんとしけるを藤吉郎が下知
を受る五六の兵卒。即地に山口が使士を捉らへ。木下が前に引居
ける藤吉郎山口が子息の許へ遣しける密書を披て閲べちかごろ
九郎次郎清洲を退去し鳴海の城に立籠り。親子斉しく力を勠
せ戸部を新丸つを殴捉らん。と符節を合せる書面なり木下つらく

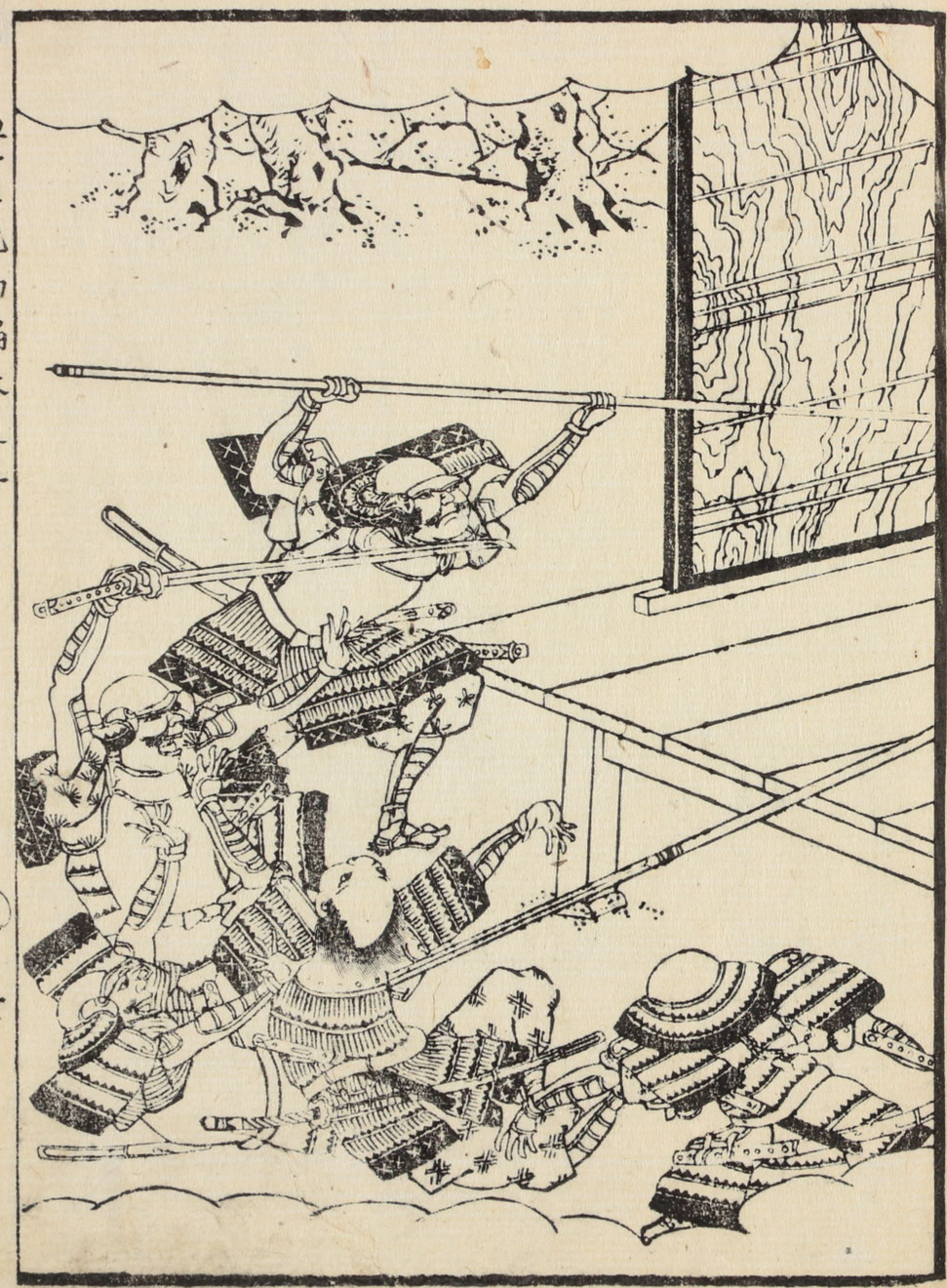
誦すん歟ぶこと限りなく。然べ紙方も山口が籌策ふ称人計らそん
とこれらの例よ計儀を添んと君へ伴ふ言上又も九郎次郎が偽書
を記ひ左る助へ偽送ゆう。ふ子いろふも虚間を覬奪し清洲の城
を道出べふ。頻よこれを計ることのくども。容易ふ道去ぐこ。唯急ぐべきこ。
戸ふと誅戮せるこを肝要。倘小子を救ちんこを遅くこそ。もその内ふ。
とべ紙まこと奈何なる謀しん。父の四方ふ禍の起らん律も量ぐ。實よ
重ひこを大歟ふれ。厂時も寧く災の根を截ふへと書記し備山口の
使を呼出し。汝ハ何處の者と問。使卒齒の根をふるつもつ。当国大
山の古民と答ふ。木下清人ふ召るゆう。若べ織田の百姓ふ。ぞや山口九郎
次郎。素より織田殿の重恩を蒙れるふ。ふ交ふる多ふん。却て織田
殿を殿ん計る面へ恰も人ふ似られ。ど。ふハ獣よ。ふるこ男ぞり汝も斯

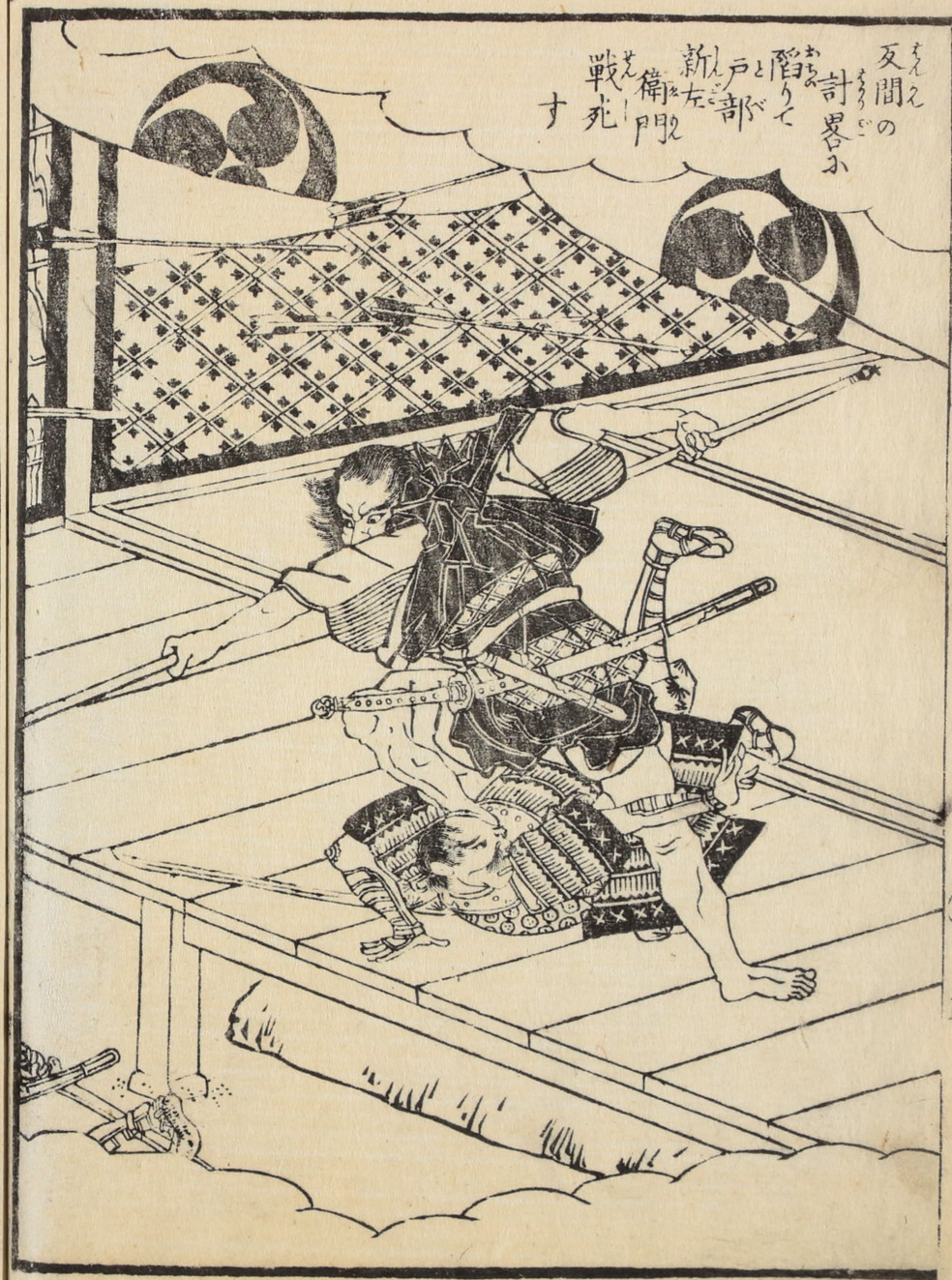
うる人ふ仕へ苟ふも父母が。ぞ君と憑む織田家人對し。ぞ乃の使
ふ走ぞこを。天罰道ぞ捕られう。汝ぐ素姓も知らう上ハ放郷の
父母ハ偽よふよ。六親眷族一人も洩らぞ其罪決ん。道ぞ。
道理ふ昧き心ふも。父母兄弟ハ傷しらぞやいふくと詰て者ぞ
彼者顔色菁菁の如くし。洞と共ふ勧解ん。ふ奴語ん山口の。
家ふ対ぞしられこを。斯る使ふ当りん。素より人の逆ふあること。
爰ふも知らぞ今日ぞへ織の御内ぞと存ぞるう。剛く勢めりぞ
うう。行こを父母兄弟ふ咎を蒙る係ふ附ん。ぞ安しと存ぞべき。唯
預らば父母兄弟。安堵るべこ御計ひ。早よ仰ぎ賜ると歳治しん伏
ぞふぞ。木下聞ん然こをあるべ。父母兄弟らし汝ぞ。罪を道ぞ
安堵のことを祈ぐ速よ。大公より命属らる。御用を楚とつとむ

山口の密使を
捕へて
藤吉郎
謀計を
熟さしむ

べきやと問られて彼者異儀もなく。何とぞ御用を肖くべし。父母のなつかしく咱軀也。安穏なること有がたく存ぜ為ぬる事なもせ〻の命ゝ面〻に御用を遂せん命せ所られ如なれ〻と答る木下笑を催し。吁神妙の稟状なり。然〻べ遠書を鳴海へ打齎し。九郎次郎が返書なり。と尤る勝へ遣ふべし。さうして故郷へ退返せ。其と尤恩賞既いんよく力めよと深切ふ稟所。当日木下彼者と同道なして大山ふ到せ。渠が親族ふ番をつけさせ。鳴海へ使ひふ遣ちゝとて尤馬助ハ往書を認く。謀とハ爰ふも知ゝ也。先新左衛門を撃とらべし。と俄ま勢多の郡中ふ居住なる今川勢の備ひを鳴海へ招集め。伴議しにひらるゝやう。戸部新左衛門が謀叛ふつき既ふ後府の主君より。係罪ぜべき許しあれど。彼新左衛門狡雄なれば猶便ふ

殴捕べき徒稱ふまじ。これふ因て門〻と兵を合せ力を一ふし笠を推蹟く。新左衛門を殴亡し。君の御恩ふあづかゝん為ぎ打発ふ比べし。と事を決しつ準備なし。想勢加合二千餘騎山は尤馬助を首ねとして。永禄二年四月廿日。申の斗撞と一齊ふ笠ふ推進て。先地〻攻ふ。探起る。了ぬふ勢多郡兼佐なる。戸部新左衛門なりと。人〻も。不意を打れて大ふ駭き。来欲ふ孰誰ぞ言赴いふ潜れ間なくとふ。もあらせぜ。風推破て乱殺しられば。鎧を被ぐよ隙もなく。老服の采配推把て走出。搦佐て挑を合。鉄砲も欲ふ多勢なり。自方ハ戸部新左衛門ふ二百人。出合従士負ともふ。故を尽して戦死せり。原来世双の新左衛門一騎家戈の槍をも負ぢぜ。縦横を尽ふ激音起尚るを奮ひ攘きぢ




疾風の
討畧ふ
陷りて
戸部
新左衛門
戰死す

来歌と山口と見るよりも獅子憤瞋の声を発し。奈何なる意趣のあれば之。恁る之道と蔑止と呼ぶを聞く左馬助法が謀叛露まこれば今川殿より速に誅戮せよとの命せり。汝も名ある小英雄なるぞや。副怯の挿きなさんより。乃者ふ首さ一部。又を蒙よと宣ひしるべ。備へ詭者の所為なるべし。今川殿の武運もこれまで。吾初出仕の軍より今年四十有二才の今日まで君ふ対し不忠の心を懷きなる。おのれのなさふ今見る。奸人よ名の穢きを掩ふれ存命なれ今川家の滅亡せんを見よ。愉く自殺せんと分を飜し法堂へ入て。肚掻斬くて死なる。嗚呼厥家の亡る則かん拉石を損とそ宜なるる今川義元滅びんとする其叛よ忠信之二の戸ふ新左衛つを自軍の隊ふ亡せしふ寡くも又悲しかり

山口左馬助嗾撃戸部誤　属　北畠発軍

一計を行て百計を得る。実よ達智の人也。木下藤吉郎高吉は山口父子が反心を察知し。却く渠が所行ふ因て。今川の拉石智勇ふ富る戸部新左衛つを滅しべ。信長君を所しめ備を高吉が一計ふ一卒一矢の費もなく。ふを袖ふし一城を得るべ也。よ元絆よこ元。と賞拍て歎ふ斯て山口左馬助ハ戸部新左衛つが首級を以て後列へ餽遣し。軍の始末を注伸せしべ。今川義元山口が軍功の量と賞美なし。戸部が種属を没却なし妻子親族を追放せり這よ戸部が嫡子ふ新十郎と云ふ者あり。今年廿二歳なりしが父戦死の由を所後嘆き夜ふ紛を後府を退去し。弟を山林ふ隠しつく父が寃の罪ふ陥て。誅戮せられし恐めさよ。いかふもなし父の仇。山口を

毆亡し。修羅の鬱怒を拂んものと謀てるこを殊勝なれ。君子ぞこふ今川家の老臣倚。素より戸部の誠忠を。知ざる者もなるを者〻這次のるのを不審。新左衛門道を諦らめ忠を宗とを勿く逆を〻らべざるべ。邪智横行の倫なるべ。是こを必定佞奸の中を妨るふ究こりと義を諫一べ聞くと戸部が忠勤を思合せ妻子一族を味返一ん扶助を加へこりしるべも。嫡子新十郎が行先ハ雲あや水あや知ざりるを。是ふ因て駿府ふへ左馬助を心頼く。懐者多りるれば。何こを一ふ心を〻れこを。中矢ふ手うこ。攻聞くこりを日を過せり。又清洲ふ上総助。義吉郎と悄ふ唱れ。九郎次郎を保をべきやと宜ふと木下弓吉堆とを渠ふ誅を加へ西ば。父左馬助憤怒を懐き義元を時ば軍を做さん。猶をれば自軍一の災ふらんふ。唯世ふ棄置ふ左馬助より味とる

べ〻九郎次郎嗚海へ逃べ新左衛門を毆る始末も。知れ山口父子の者。おのれと力を逼後悔ふし。駿府へ容易出仕もるまじ。然あるハ。織田家へ真実ふ降参る歟こし又自滅るの二道ふ因て九郎次郎を世侵ふ助く。嗚海へ逃とも。何量の縛ふ做発一ふ。力ふ一も心を革め。父子共ふ降参せば二個の自軍を備るふ。毒薬を〻ド〻良薬。と成る道理ふ這等るあや。と言をふ信長実ふ然とを。と山口が指他ハ罷させり。偖も山口左馬助ハ。悄ふ九郎次郎へ書簡を送て。戸部新左衛門を毆る后ハ。いふも心穏ふ〻を。悪変のあるきうちふ虚を窺へ逃なれ。と書記るふ九郎次郎。戸部を毆る不審ハ晴ふ。父の密書の心ふ〻ねば。一先清洲を遁出ん。と其夜悄ふ準備せり。織田家ふも山口が逃るべ。あげよと世ふの体を。ふうと虚明を

窺ふて。夜陰る采ふ清洲を道出。鳴海を當て走さりしが。川落籠の呼ぶころ。父が許ふ駆せて。左馬助ふ對面し。戸初が緯を訊ねべ。父ものぶろ。密書を奪ふて帰りし始。新左衛門を殿さる。未だ仔細ふ遠を譚せられば。九郎次郎ハ鞆果をれて織田家ふ謀士あり。反間をなしるるらんと親子迎ふ顔着合せ。あまさび嘆息し。後悔ることと限なく。斯ハ愈父子が勿のうへ。後天安藤ろうがうんと晝夜胸をぞ痛めけり。厥一條ハさり閣つ。茲ふ勢列の國司。北畠大納言具教卿。累年尾列を斬取らんと懐起と有とハども。月國の行業多くしく今ぞ軍を發さざりしが織田家の威勢次第ふ彌盛を来ハ尾列を大畧ふ。次第めしと角へるまで。具教安き思ひせず。怠棄ふ行々ハ虎を廣野へ放つふ似たり。先ん大軍率て清洲へ推進せ。緩兵急ふ責起るべ自軍ハ大軍ふしん兵強く馬肥ろ。場ハ十二代調練の驍勇なるを。欲ハ小勢の其ゆよふ短練微熟と角つるうへ。伊勢武者必勝のぬるるぞや。發軍ぞんべあるべうべと永禄二年四月中旬。子息左衛門具房卿を觸とし。一族旗下を集め。尾列攻を評定を。さきふ家宰ふ北畠

一志郡木造本の俗人村上源氏ふ強る。一志郡木造本の俗人村上源氏ふ強る。

進出這遭の御評議最も利あるふ似たりハども。熟く信長の行狀を窺ひるふ。智勇兼備ふ越る緯ハ。食よくられを知ところ。勿て有るべ光るべしん。いろの大欲も貪とせぞ。向ふ處ハ必ず破り。戦ふ敗べ小欲と悔てが。況や尾列へ向ふ。境ふ佐屋の大河佐屋川ハ勢尾の堺ふ在むられ尾列海西郡ふ屬を昔ハ一流ありるが今ハ二流と為て中洲ふ三十八村を置水陸の增減古今ふ変化あり。自軍欲地ふ攻投く戦ひ利あく

退くとも。大軍容易に退ぐべし。欲を悔る者へ亡ぶとのべる金言あれば。除く御賢慮あるまじや。と稟をに具教頸を左右に呼名尾列を懇望せしへ。苟且の縛なるべ。我年来の志願なり。然ども自國に事多くして遍ねることを本意なれども。其家斯彼の臣家に乗じ此幕下なりしを。誰ら甘じて信長の下風に立ことを好まんや。尚家は既に十二代位を二品任職に大納言なる名家なり。渠と我と。対揚すべきにあらぬども。彷に乗れば。絶を用ゆべし。渠倘威勢増上して尾列一國を平均なさば。容易征伐なりがたし。今夜ぞんば何の日か我が予を遂ぶべき。既に思発するなれば。今更荐び変じ已に出陣の伴定せよ。と心決して夜なるに。貪く世義に門意せり。這晌名屋尾石見ら。姓い藤原。伊勢飯島郡富永の列を出て稟を乞う。信長彩り質城主なり北畠家四家老の一家なり猛烈に。いろいろ欲を怖て縛なく。競て進むと明らの長に因て愚案をなさに。自軍の繽紛を背地に境の大河を推りたり。尾列へ征投様体をなせなば。信長定て川側に出張して軍を挑まん。這晌自軍を三隊となし。一隊は川の東に伏垂一隊は川の西に伏。信長血気を沛して攻蒐り自軍の正兵。ぐとお輸敗走せべし。然らば信長猪に乗て。退来らん晌東西の伏兵一騎に合り廻四方を罩で殴りのなべ。信長をお捕ること伏のあを擒よりもたく。信長をぐるお捕べ尾列一國征を共属する縛絶ひなし。と何凉しく速べ。りしべ。具教大に感悦あり。晃寃竟の妙計なり。開由兵は神速を貴ぶとなしいふなるを。快く準備せべしとて其分給をとせられけり。

新國司具房卿を為大將とし。五千餘騎を率從ゝ。佐屋川の這側に陣を張。これを正兵とし。次に安保若狹守（平城天王の後胤にして大枝氏伊賀名張の城主）八千餘騎を從へ。川の東に理伏せり。偖又一隊は織田弥三郎（後に彦右衛門と名乗り多聞氏なり伊勢敏郡郡丹生の住人なり）を將とし。八千余騎。同じく河西に伏せり。表平の岳尾の森は國司の旗本に加わる。熱勢二万一千餘騎勢列飯高の郡大河内の城を進発せり。永禄二年四月中旬の緯なり。三日を期せり。勢列なる。来名の瀧に流れ。斯と清洲へ注進しられたり。信長大に怒せり。憶譏懐なる緯なこと。伊勢と尾張へ大河を隔ひ。滄海を隔られば隣國なれど這方より一驛の馬を進めざれば然あるべき所謂なり。然るを伊勢武者剛戈這へ大軍を率て来ること。恐らく不當なり。予速に絶朝に只一揉に追還さん。早々出陣の準備をせよと即日に城中へ徇蒲され。桑田佐久間牧井池田を叛らん勇烈無雙の尾張武者。熱勢五千餘騎を率從へ佐屋川當へ進む程に。小畠水も佐屋川の岸に陣ぐ佐くり。織田勢既に川側まで寄り。然しく這に陣列なる。這响信長陣頭に出馬し。川より那向を觀くやれば北畠勢五千計。旗翻しと勒くり。さくくと見絶り。偖ねを集めて曰く。北畠大納言。数代勢列の國司なり。威勢を國に振へど。俗来弓馬の家にあるなる。その旗下の諸士なども。武勇に優れ者を聞く。只其采地廣ふしく。人数の多きのみなれば怖ろに思ひしが。方僅又那向の欲を見れば其勢五六千に過べきなど。分不相應の小勢なれば蹺蹊なる有べきなれ。然ども自軍の軍兵は日来鍛練せしのみなるなど。屋女戦場に

里夫を借て藤吉郎佐屋川の

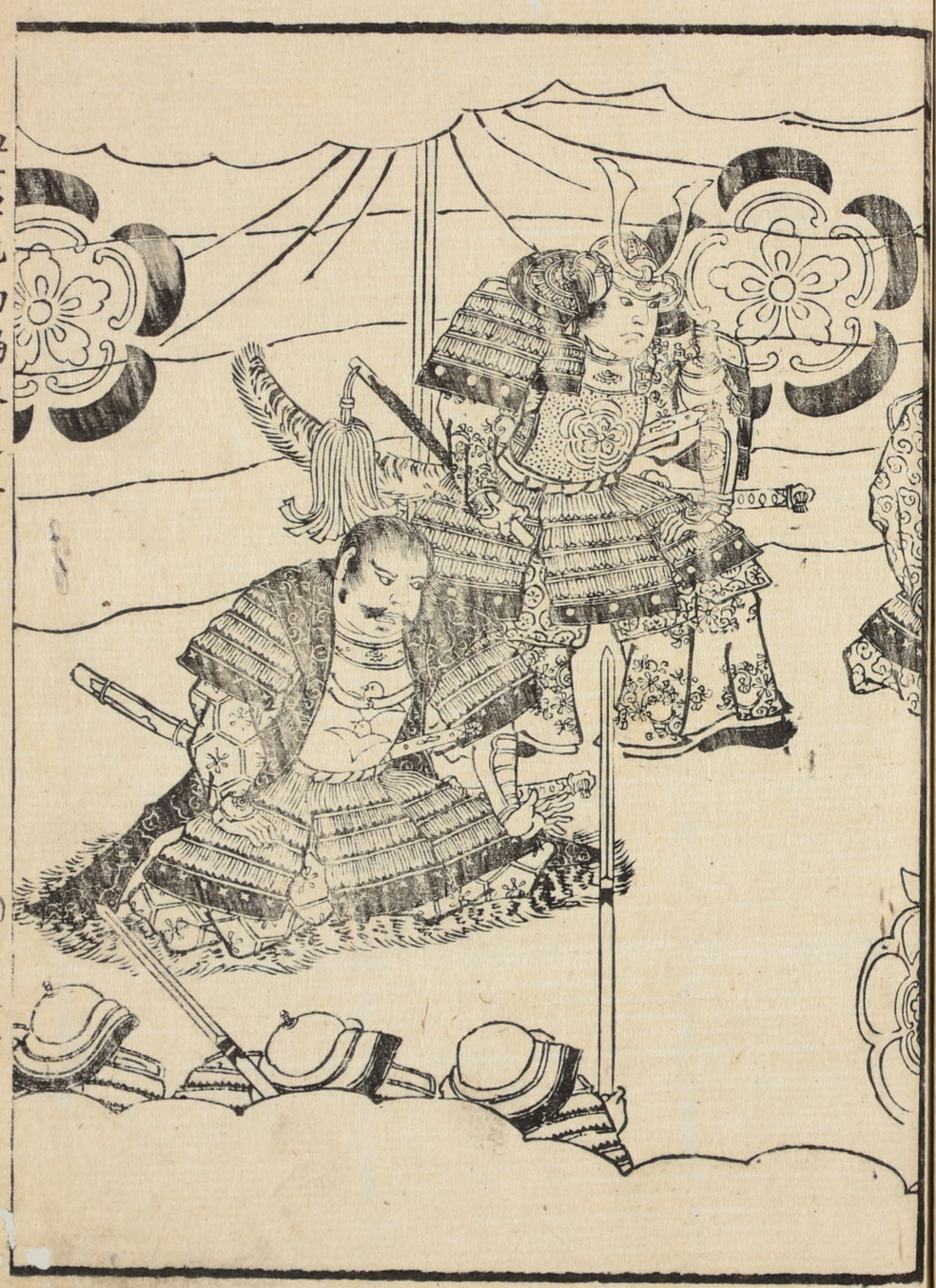
足固めなり。鋼腸肝を鼓吹せりの如し。自軍を他兵に較べ貪られ一騎當千なり。若し敵兵百万ありとも。何ぞ怖るゝに足らんや。速に佐屋川を渡り。輸く一戦なし。尾張武者の勇気を示めさん。欲一遮もさへぬを。逃去らんとて眼前なり。兵倦疾くに渡せと指揮しあるを佐久間信盛進出て言へり。汗も小畠殿公家より出る。弓箭の道に疎しとのたまふ。先ず犯境の府大将軍（陸奥出羽の按察使）大納言顕家卿。弱年ながら陸奥に下向し。累代拝朝の衣冠を脱棄朝著の為に甲冑を被き大軍を率て所くに戦ひつゝ伊勢一国を次従へ今まで既に十餘世の子孫を泊ぶ其雄下の如し。如何の勇士なりといへども。斯る戦國に繁昌せるや欲を侮て怪んぜる緯。軍議に及ぶ殆危し。況や大河を渡し。食を

故の采地なり方僅に小勢に見ゆるとも續く勢日重なべし。条忽に進を為すに。と稟を偖て柴田坂井森池四人相義に問ひ。辞を尽して諫られば信長重く宣ふやう。面の異見一理あり。若しも得て此地を出馬し。兵河を渡るを待ば仇を軍の斯となさん。徒に對陣して日を費さん程なら出陣せざるに劣るべし。と稟を柴田權六勝家君の曰へることなり。若き軍に見良策のせざるところ遠遠の出陣に預て朝しる緯に如もあらず。欲の進るときく。防戦の準備なしるのを好ず戦に暨べ長陣の為に國中の変あらんを謀ず。只世所に二千の防禦の兵を残し置て御帰城あること宜しと諫めるに上総助心いまだ決せざれば彼新参の小猿ぬ賢しく付く者なるぞ。小猿いのくと呼ぶ。四方に

高吉見えざりしが。要時など経て出来たり

木下高吉勧渉佐屋川戦 附 藤吉先進

隼鷹一顧よく獲たるのみ。方僅頃刻を経る隙ゑ木下藤吉郎高吉疾くも敵地を窺ひ自軍の陣へ立戻るを大将信長御覧じて小猿めが行ふ陣中を左ざる快来られよと呼さもあり藤吉郎へ小走をつ。御君を八蹲まる。織田徴木下ゑ向ふもあひ備ゑの評定いまさ決せざ進で戦ふ縛やよろ。又退く縛ゑやうきや。汝ゑ何ひ及んせ。異見を聴くと回されば藤吉郎跪を抬げ。恐る戦場の期よ且退く敵を追ばゑ。ゑ大るる笑あらん。快く進まもあるべ。と言を采田大ゑ怒を。汝いゑるれば素ゑ若ある何を言ふを。我君血気の事ゑ信せ。揣らせ。ゑふを諸老ほられを諫めまるゑ。汝一人軍を進めく。自君の御心を惑せまへらを。以ての外の槌杪児ゑ。いゑのればをむゑ利あるて。退くゑ笑ひありや。所存狂を倡く聴くと声振せ。詞を。藤吉郎莞尓と笑ひ。生く活る物。魂なれば見あらざ魂あれば所存あり。ほとゑるく若ゑ仕人心を竭を忠儀とを。ゑよと所存を狂を。開もゑ畠の諸軍勢。尾張の國を斬取らん。と選く出陣せしめゑ。彼川岸ゑ陣を居渉らざるゑ狂豫の気なり。我君これを防ぐと法ゑを幸ひて出陣まるく。直ゑ汚をおらしん。我ふべしと直まをるゑ。ほ祇速の鋭気ゑまるまを。自軍の兵きを気をとりて。他兵の猶豫の気を敵とをゑ。必勝の勢なり。ゑ軍大将の機ゑ固るりのなり。我をんと曰で速ゑ我ふべ。然るゑ時機を



佐屋川の高論ゐ
藤吉郎諸將を
伏〳〵信長に
渡戰〴〵事を勸む

奔初しなば。猥に自己が心に任せ。軍を止めずるに成たの所を
なるべし。即今尾列の勢をりて伊勢武者に向ふが危くべいなり
尾列の勢をりて。天下を欲ひき交をそん。今日の軍に安泰なり。
馳駐乳なる伊勢武者を危ふくして率返さば。尾列勢の鋒尖
塞けん。成まじく喪へん。敵に愈く勝に乗べし。勝に乗る大軍
なん。鋒尖塞けば小勢と合さば。百戦なりとも百遭敗まん。是ぞ
退くの災なり。急速に蒐らせ玉ひて。亟三亟三に川を推渉し。挑
戦ふりのなるべ。勢列武者を佐屋川へ斬流しのふをべし。方僅
川巷の勢列勢に五六千に過ざれども。一万に六千の人数をのつく。
這地那地に埋伏なし。川の央へ渉をし。响伏兵起て敵捕んと計り
しに想違なるべ。自軍の勢を分く。敵の伏兵なるべ。亟る河の

東西蘆葦の幾際こそへ迸進なるべ。一當あつる程なるべ。敵の
計策想違しん。自軍の勝利となることを必然。それを退陣し
無ふ云を来りて物倦なるべ。日本國を欲擒け。天下を御まふ
拯らせ無ふ事の叛に御思案を。廻らきれゆくべ。とにとしも惜る
所なく。辯舌凛くと速なるべ。素信長に玉ふを。戦ん繹
を思されしなば。藤吉郎が計策を。絶妙なりと悅び玉ひ諸軍に
嚮向ふて宣ふやう。汝倩もよく聽つらんが。藤吉郎が説ところ大器
ふしん本意に稱へり。予初戦の軍より。危急を犯して身を拋ち。
正射に驅ることを卸し。敵を敵こと数を知らぞ。それを血気の勇
なりと嘲弄るのも有べられど。合戦の道に厥ふあらぬ。今藤吉郎
が言を如く。軍に唯乳の前後に因まり。既に予心決しられば速く

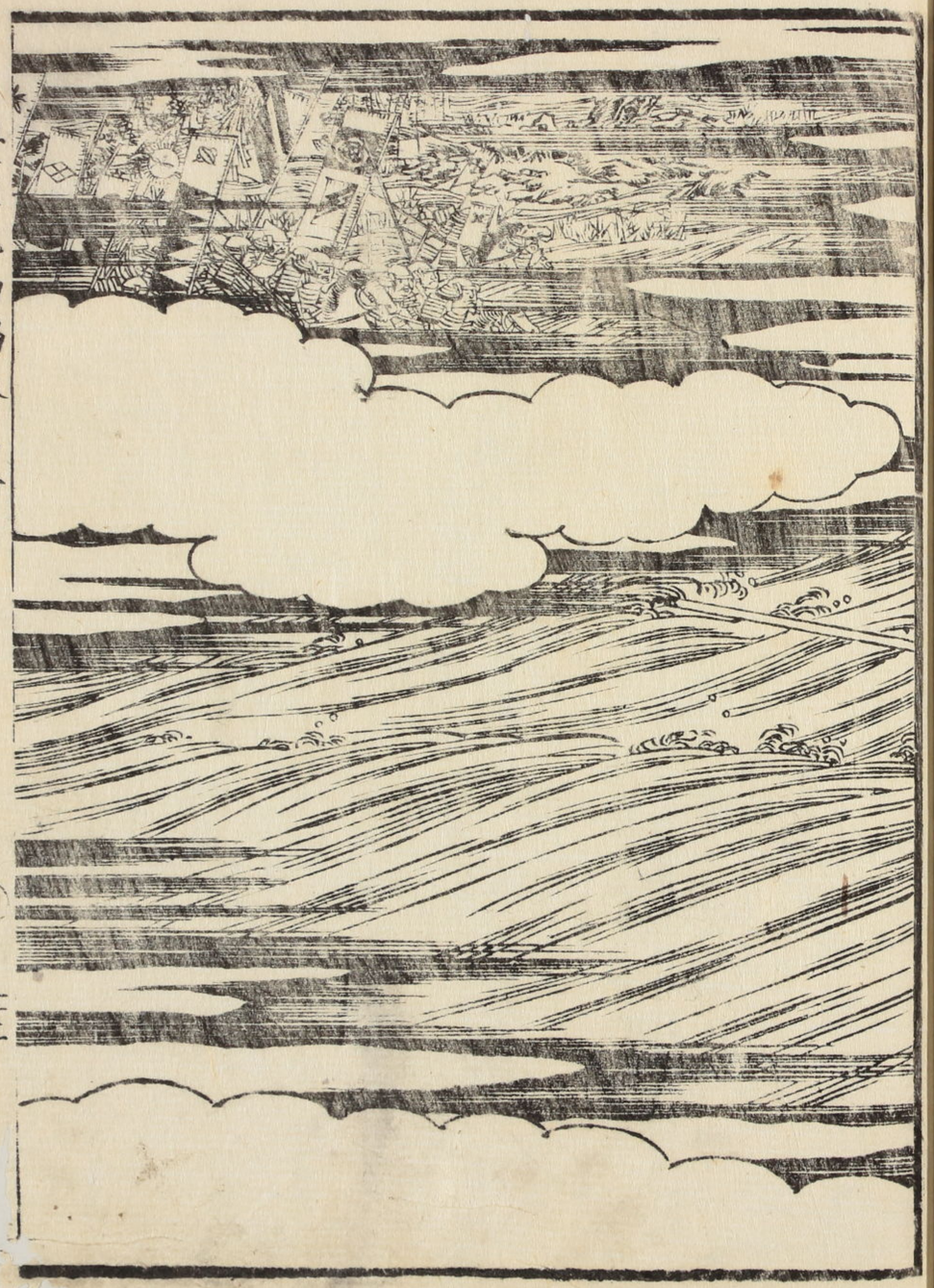
川を推渉し。闘ふべしと指揮せらる。柴田已下の諸勇士侍。藤吉郎を憎る倫輩い更に進ぐ。闘そんとさる気色もなくを。猶猜ましく柴田勝家。木下ふ朝ひ。汝辯舌新利ふしん。危急の軍を進めまいらせ。自軍を死地ふ向さしむ。且又敵ふ伏兵ありといふ。證拠をもつて謂ど。實に勝べき道理あらば。誰ぞそれを拒むべき。這に連る譜代の老臣。智勇勝れ者あれども。敵の軍累伏兵のありやをるるものをきふ。汝獨が口賢く伏兵ありと言ふ条奇怪ふ听へり。とふを高吉さりあんを。柴田殿の御疑ひ然こそ有べき辯にをん。小臣とても凡夫ふしん。天の通をはるふあらねば。居ぐらし敵の實否を知らんや。厥ふこそ猶家ど如き。佞き方の一得ふく既ふ虚實を探り知る其所謂いんと是を説ふ。我君這地へ御出の時。敵兵の多少を見量りぬれば。悪の外の小勢なるは。所縁こそあらめと存せしを。小臣獨間伏ふ。渉渕の指南を承听。流頭をお渉し。敵地ふ到き這陰那陰。と走遶て窺ふふ。まづ正隊を悄と観まを其勢譏五千ふ足らぬ夫より一里計を隔て西と東ふ伏兵あり。其より百歩ばかりも遠方ふ。目属の木を樹らるが。早ゝ告斗の設ふん。正隊の軍兵侍。那地まで敗走しつる比伏兵東西より奮発し。自軍を左右より推挟を。総捲りふ返合せ。三方一圖ふ斬起んと謀らしのふ想違ふ。然られば敵を彼らん辯。りこもらうやそくいぞや。自軍五千の軍勢を。まづ三隊ふ分伍つべし。一隊は我君二千餘の御勢を率ひて正面の敵士ふ合せ如ふべし。必を

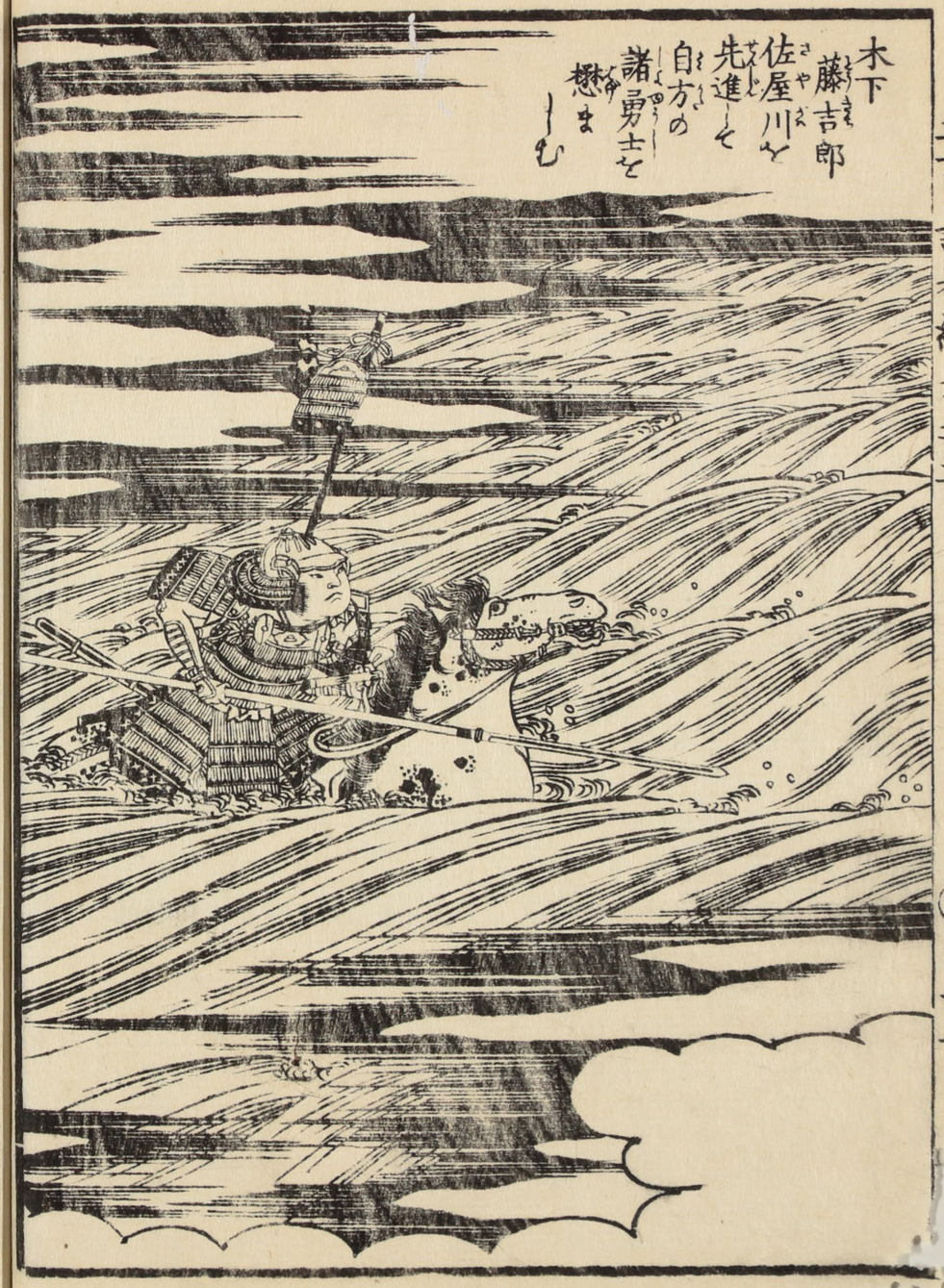
欲兵誑走らん。其時自軍隊伍を立直すと追起ん。目属の木まで到るべ。亜二亜三ハ攻来ん。それこそ欲の計策ハ違し。暗号を紛るる暇もあらせじ。這ハ誑退も立整ん方術なくして。実の敗北絶ひ。然れば東西の伏兵も正隊の敗走ハ乱れ怖し。勿く援救術も知らじ。失趨ハ逃るふさん。くれハ自軍の猪利なる猝。眼前ゆえいと言ハ織田殿ぎ。魏然として歓驍を怜ふ。ふしぎの猿冠者なよくも欺地を窺知しと。先汝侍も予を懐ぐ。妬きの意を停止らと。藤吉郎が奇計ハ隨ひ。再度の異見ハ賢ぶべうしと。準備せしと命ぜるハ。木下依怙の元輩へ。智恵感ぜるハ餘ぞ。さんも奇態の名士なと褒るもあれば偏執の心を懐く奸士へ。

愉うしとおひ。此理を被るハ河なく。蔡く指揮ハ考く入れハ。信長三隊の伍部を決む。まつ東の一方ハ。柴田権六勝家を大将とし。坂井右近を監中原小市郎。佐く隼人を副とし。其隊ハ一千五百餘騎。東の方ハ埋伏せし。安保若狭守隊伍を殿べし。偖又西の一方ハ。佐久間右衛門尉信盛を大将とし。遠山甚左郎林藤八服部小平太ハ先鋒とし。千五百餘の兵輩。西ハ伏る勢列勢の。織田彌之助が隊ハ蒐鬼と。最ハ定められを。残る二千ハ大将信長。次三左衛門可成池田勝三郎信輝毛利新助秀詮。這侍の雄士を率従へ。伊勢の正隊。左ハ具房が陳ハ攻蒐らん。と隊部既ハ定まりられども。今日ハ未の下刻の時ぞ。明天蚤朝ハ川を渉し。推進べしと諸軍勢。厥準備を成う

佐屋川の軍ふ
信長兵器を
藤吉郎に
賜ふて
先進を懇
む

けり。然るに當夜藤吉郎。悄々地より池田が陣に忍び。信輝をりん言快しるゝに。明天の軍を慮るに。主君の向ふ所を知らるる正面に必勝しぬれど。西と東に向つる。士くの勢不足なり。よく〳〵御指揮あく〳〵と心を殫し述ふるに。是に柴田佐久間の両將。藤吉郎と不快なれば。今日木下が言快せし。謀をもつてとせば。誤もあらんと心悩し斯に言出る。信長預られの縛をも。推量しなはせしに。既に奮発んと若面に晌。柴田佐久間を呼よせ。正隊具房に取に足ねど。只大事なるに伏兵なり。武士よく〳〵力を竭し。彼東西を防ぐれよ。其隙に正隊を破らせ。自分も軍士と共に。御遊侍と合隊なり。揉起るなれば伊勢武者ども駱べき。佐屋川へ追込ぐ。鑒に〳〵只今日の合戦に。後陣こそ大事なれ。吁賢鄙性を挙止。故の若ひを更る。と宜ひ棄て馬を率よせ。崑崙と跨り。川に臨み心見あべ。木下藤吉郎高吉に威糸羅斷し鎧を被ぎ。馬に乗り。騎を窪しなれば。信長心中に憐を加ひ。智謀拔群の木下なれども新参と小勢なれば。甲冑さへも首賤らしく。馬をぐに免されぬ。ども武者の列に加はる。走廻る縛の可愛さよ。渠が今日の功作を。動めでやと思されしに。紺糸威の甲冑に夕顔と云ふ馬を添。九尺の短戟一齊に。これを高吉に賜く。這鎧を被。這馬に乗跨ん。今日の先陣勇めよ木下。と宜ひ給ふに。藤吉郎肝に銘じ有がゝく。これを拜領なしまつる。蟐龍の雲を得たるに。意味。吁られしに快るも。河の淦流に試安らり。先や斛騎にまつらん。




木下藤吉郎
佐屋川を
先進して
自方の
諸勇士を
懲ます

進ませ給へ衆くとて。木下正頭に騎発ゝり。勢列勢に未明より。巳の下刻まで待ぬれども。川を渉る乱色もなくねべ心怠晌こそあれ。藤吉郎が引導めく。遥那流の河上より。馬を飒とお投ぐ。ゝること蹴起進ませつゝ。深き所に輜を緩め。既中流へ出るを見ゝく。信長諸士を眄り給ひ。猿に継けや兵士輩。小猿一個に功名させ吁壮兵士予を越せ。大張猿に秧林なれども。大膳不敏のものよこそと大音声に解辞し給ひ。河湍に投るそゝれゝ一士騮るべを。五千餘騎の清例勢一驤に突と騎投ぐ。騫地は河お渉し。向の岸に登るやを否。鯨音をつくゝ伊勢武者の。揖面窠と捌蒐る。北畠の軍兵に。這より敵の渉らんと懐設けぬ繆なれば。防ぐ方術の想違し。鳥銃ゝゝおゝるのを。石往

左往と散乱せ。恁るところに木下高吉。彼夕顔に白熱涎ふらせ九尺の短戟を扱奮ゝく。正真地に鏃蒐る。これに續く魁軍の雄士池田勝三郎信輝。赤三左エ門可成。いづれ劣らぬ一騎當千。自己おられじと駈ゝりる。伊勢武者これに辟易し。立脚取次に入る所へ。ゝるゝと鎗を捌投ぐ。縦横自在に戦へば。鳥屋尾赤本ゝゝゝゝゝど。踏止ゝ裏ゝゝ。時分よそと偽走る。然ども織田勢預ゝより。密意を偽ゝ緯なれば。目属の木の立ところ近に。隊伍を固めゝ後ゝと。追蒐に来もゝ。目属の木の見えゝゝゝゝゝ。そゝや内應のところなるぞ。各ゝ励そ揉起よと。指揮なる程こそ勢列武者大返ゝに返ゝゝり。然ども織田の部伍に。鐵よりも猶堅固なれば。殿ども欲ぎ寸隙なゝ。

伊勢武者所妄時戦入しが。退色いかる兵倩遊うぬて弱る。を。木下存ち声烈し。各く這途を脱ぬる勇士ぬと味るぬど。大将そぬめ高吉が。指揮ぬ隊ぬ綽ぬれば。二千の軍勢面も振らぬど。鎗節間を作り蒐。捲起こる勢ひ。千龍巨海ぬ跳るが如く。万虎巌谿を走るぬ似こり。唬叫ぐ木下高吉正魁ぬ駈起まぐ。信長縋く推進く烈火激水の威をぬ立られて大将奥房既ぬ危くぬくこる所へ。島屋尾杰本取く返し。必死ぬ力ぬ歌中より。奥房朝臣を救ひいぐ。多を辛ふぐを逃行を。池田信輝大喜あげ。國司名ぞく留く。咱言を詞を聞しめを。井も昔より織田家ぬおひて。這笑列へ一遣も。馬を投こる事ぬるぬ。恨ありて孫佐ぬ。

北畠殿大軍ぬ。織田の領地を奪ぬんと。道ぬ背けること。ぬく出ぬや。織田の須ぬる尾張の地い國微ぬれども狭ぬ。兵些く出ぬ龍虎ぬ齊し。又とぬぐぬ出ぬぬ推進ぬ。其時い活く返ぬ。這遣い御命ぬぬく出ぬん。と。ぬる声ぬ奥房驚ぬ。大ぬ周章く落馬せしを。多屋尾杰本外抱せられ。這く孫兵四五百引率。大河内を當く逃こうしぐ路程五六里ぬ其間ぬ。太刀武器いぬ暦ぬど。甲冑よりこる生心。員を尽しん棄こうしと。尾張武者の得ぬ大ぬりぬ。這晌信長逗止を。本の陣場ぬ渡返し。魁隊の兵を呼返し。馬幟を樹ぬを。自軍漸次走集を。贏戦をぐ祝しこう。悲ぬど。柴田依久間の安ぬい。安保織田が埋伏の陣へ逆進こうしぐ。不意を

られて遊べる隙なく。弱起さる其中へ鬼柴田とも恐れし勝家。三尺八寸の太刀うち振。奈羅延神の猛威をふるひ。数首を切ること一百余級。佐久間もこれに劣らぬ軍し。意のまゝにぶんどりし。信長の央隊に参向し。軍の次第を言はゝ

藤吉郎紀福冨失金龍笄　屬　髙吉奉賞

白氏が古誡に。李下の冠。瓜田の履。實に眼前の理なるに。賢愚也能かゝるべし。厥疑ひあるものなるを。然しも解と解ざるに。是ぞ賢愚のとろもなる。然るに信長に。這遭佐屋川の勝軍を。大に恥失し給へり。今宵へ這に滞陣。暁なば蚤朝坂陣せんと。其準備をぞ徇られる。這な

木下が堂部。福冨平右衛門とゝかゝるのあり。奇行なる間虚のあやまちかや。先代拜領なしし。金龍の笄を。偷まれしし。穿鑿されども知れざりし。或者平右衛門に告るやう。部下なりける藤吉郎に初き時より放蕩にして。盗を好むと聞遊びぬ。まして眼光尖くして。盗を出るやうに見へしし。渠を詮議し給へとのふ然なりと平右衛門。藤吉郎を叱とし。部下のものをよび集め。然体らしく謂けるやう。咱失ひし金龍の楴枝に。故殿信秀咱を御賞義ありし。授賜りのなれば。秘蔵ふもまさに大切なり。且這器を偷をし人。預め吾知つるぞ。其名を當て外も蒙し。器ぶふ返さば穏便に。恥辱をもつて他へ為せず。快楴枝を返せし。咱その報ひに黄金を

貶へん。倘ほ遅くせば怒捉へ。辛き目ゐんせんいろゐどやと怖しの賺しの高吉を睨まん。罵を懲せを藤吉郎。今平右衛つぶ咱をりて。盗人と思ふこそ誚懐ゐれ。惜さも惜し然ゐがら。彼柿枝を偸うる盗人を出さぬば。咱分の悪名も雪ぎがた。先奴捉へくらまんぜりのと。心ゐ秘しん在うしぶ。平右衛つい已斯ゆゑ。試めうるを今宵のうち。猶て来く返とりめるゐん。と僉退散を叙させうり。藤吉郎い陣中の指他をよくく聴ぬるゐ。平右衛つゞ馬の籠。藤吉郎が盗をしゐらん。と曰人よ者しと聴しゐば。借い渠奴が所作ゐらん。と工風を設けて陣を脱出。沸島津島ハ佐屋より正北一里ゐあり。とゐくる里ゐ到る。這ゐ堀田孫右衛つと ふ豪富の家あり。金銀多く貯へられば。典當くふりのを日業

とせり。藤吉郎高吉い這宅の頭子ゐ対面し。柿枝の事を尋ぬるれ。ゆゑ誰ども典じ来らを。餘所の伏家をし宮合をへし。と沸島のうちを訊ども。霜くるしとの縡ゐりしゐば。這よりを孫右衛つ。藤吉郎ゐ告うりる。然しば要時窺伺ん。と高吉い後堂ゐ潜居るゐ。果しん暮ゐ向ぶころ。一個の漢子這宅よ来て。金龍の柿枝をさし出。青鉄五貫文典らんとゐふ。孫右衛つ把く看ゐ。藤吉郎ゐ渡る器ゐり。偖いと高吉ゐ告知せ。柿枝をりて看せうりれば。大ゐ悦び其侭ゐ。一隅亭を跳発。為偸の漢子を捉へかゝ人。捆揚て面をゐるを。平右衛つゞ籠ゐを。水下酸と業を拍く。咱當ところゐ違ちゞ。と其侭怒起ゐりるくて福富平右つ。藤吉郎ゐ陣中ゐ在ざる縡を。大ゐ不審。そこを

木下の明察
津島の典家を
笄を探出て
偷名を
潔ふと

渠儕ぞ偷取事露まるべ罪せられんこと逃るるるらんぞ。遣
徘を言はるし。急途逝先を弱ねんものと信長の本陣ふ到る。
木下藤吉郎私奏しに。嘗て逝先の初れぞ。その徘ふつき訴
べるに小臣昨夜金龍の掃技を偷まれり。極とせ證拠い
るしとりくども。倘高吉ふあるざる欣。御詮議下しかるべ。と
言あるると上総助。斯ふ不審成徘ふるを。藤吉郎が性として。
那許の器を欲とせんや。勿く盗をふ分と誤ち。辱ふ遊ふものの
るるぞ。と思されれどもさし當て。藤吉郎のあるざりしるべ。其行
ふ命じて。見聞さもんと平右エつと退る。交く池田勝三郎。御前へ
出て。言しるる。午過るころ藤吉郎。聊用子のあるふよや。
津島の里まで出行んが。速くべ才日。遅くべ夜ふ入て帰陣をきふ。

掌部る福富へ。思材ありて初せのあるを。倘御前より御召
あるべ。よるふ謂時しまれるし。と。のを忘れくいるる。と聞し
めされて信長へ。然こたあるん。然とたるる。所由いるふとと高吉が
帰陣の程を待まふ。酉尽るころ木下高吉。猜見漢子を郷て。
信長の本陣へ参候し。池田とのるて言はを。這遣平右エふ
金龍の掃技を失ふる。然るふいるる者ふやあるけん。藤吉郎が
偷を。とるふを福富實とるし。咱を罵る抔憾さふ。斯條〻〻
如件〻〻。その偷児を捕へ来るる。よるふ披露しまれと
言せば池田勝三郎。掌拍て大ふ悦び。掲くも計ひあるものるる。
然るべ御前へ訴へん。と信輝即時ふ御前へ出。藤吉郎が詞の
如く。詳ふ申を言はしまれば。信長ふも安途しまひ。其偷児を

禁面せよと勝三郎が命せらる。信輝奉命を嚴重よせめとひ
られば何その隨。招道なしと單が命を。叔させあへと泣伏う。
這晌池田勝三郎福富を招よせ。所偷の柿枝をさしつゝ。
其方ら失ひしか。這器がかあるやと問へば福富得と見つ。
紛もなしとぞ答へう。然ば賊をも賜さるゝぞ。奉受よと努
出をと。平右エ門が心中が定めく賊が木下ならんと思ひ組語
せしが籠なもべ。今更悔もて詞もなし。斯る所へ本陣より。參候
せよとの命が福富。面目なく御前へ出。信長何が含譴ありて。
最も為づらが宜ふゆう。武士の刀を佩ぶる緒へ。奈何なる要の
あるりのぞと問へば平左エ門。心はづる所何と。思へど
答へざる晌へ。あしらてなんと何乳なく。然ばいか刀へ武士の魂姓

とて。只ぐあが一分をるるとう承聞ると言しあるを上総助。
苦しく笑ふせ也ひ。かの也もれに知りつるよる。武士の魂うう
のが。鏑安なる柿枝とも。偷ゆるゝを知ざるへ。たの分の安危よ
心つゝ。魂とも化が棄也。武道が怠ると知れうう自家が
士平が偷をしものを。却て外人が罪を負せ藤吉郎を疑ひつる
條。最寃き心なるゝぞや。證拠なる事を訴出しへ武重が
なし。かのれの魂を化が偷まれ。証とかもりぬのをなしぞ。却て
化をとるが仏体。なんぢが如き虚心輩へ。終よ藤首を撞べし。
然ども武道が昧き族へ。信長の家ぬへ女なし。切へ日本を
修行しある也。虚心の名をば雪ぐべし。それ追退よと勾む舎
帷幕の内へ投ぬへ。平右エ門へ恐怖なし衰く池田が陣所が

来て。いろ〳〵と勧解をゝのむに。勝三郎も便なくかりんど。主君の怒を宥ゝぬれば。時節を待とよと云ふ福富詮ゝなく。主従離散し。窠浪せり。偖信長は佐屋川の陣を既に拂ふ。清洲に凱陣ましく。這遭の熱功を義起。諸士某〳〵恩賞あるに。先木下藤吉郎高吉を呼出され。佐屋川合戦の事。つひとは敵の拙策を探出し。軍を進めて勝利を得る緯實。汝が大功なり。加之先遣の砦を取しも。全く其方が心に出く。國勢を佐邦しゝこれ抜群の奉功なり。人に功労ある時へ。褒賞なんをあるべし。先日修理せし機會なり。いづくゝる百貫あり。七を加へ〳〵五百貫とし。旦織田家の舊老。木下雅楽頭が家を継ぎ。父の一字を諱名にあさへく。

秀吉。発吉の号を立ることと六角家へ使者をし時より。と革稱老臣の列に加らせ玉ひ。新参の辱をまぬれ。評定の席に列座せられ。訴詔の詞に直に伸よと。命を奉て藤吉郎。面目にあまる恩澤にあまねく。ひ是を拜謝し。御前を退出。家に還れば妻いさゝかなる。又在工門まで。大に悦び。賀を舒る緯ぎなり。然られば已来木下を。佛しめ侮る。窠しゝるとと。実に情意よく着えゝられ。然るとに上総助。伊勢へ哨々地に間者をつかし。事の容子を窺いたるに。佐屋川の一戦に。織田家の武勇を怖懼る。存び恥辱を清めんと。義勢を立る者に。唯信長を鬼神よりも。猶おそろしと語合へり。と告るに信長雀躍し。大口開て歓笑し給へ。斯いよ〳〵時節到来せり。伊勢

武者拳て尾張を怖る。臆病気味の醒ぬうち。此方より推進て。北畠の一門を。悉く砍磨らんと諸老臣を招集め。いくさ評定ありける。北畠殿先日ゆ。予國尾張を砍取らんと軍を當的られし。緯。近来りて憐愍なり。然ども自軍の勇士ゝ力を竭して防ぎしゝ。唯一戦ゆ勝を得つ。伊勢勢却て膽を冷し。夜泣の児も怖ることや。今這怖きの抜ぬうち。此方より推進べ。よも遮う緯能ふまじ。必然一挙ゆ勢列を。お破らんと目前なりゝ。いかゝと宜ふ詞ゆつる。柴田権六佐久間右衛門。預て佐屋川の戦ゆ。伊勢武者の剛臆知られば。勇起て戦を勧め。快く軍馬の御準備をなるべきと言ふ信長。あるを聞られを歓び給ひ。其座の評定決せし。

出陣の指部なさんと宣ふ。晌ゆ木下秀吉参候せり。信長近く呼ひ給ひ。勢列攻を語られれば。秀吉謹て承所其御軍略ゆ似られ。甚めて甚めて。なるべうを。先度の軍ゆ北畠既よ這方の弓箭ゆ怖る。荐び這地へ足踏をまじ。唯此隙ゆ國を治め。根を固ふ。ゆこと。御軍略の要なり。厥なく軍をおこしあひ。他國へ乱入ゆ。福変ゝ禍ゝ。伊勢武者衆弱ありと。ゆ。國廣く軍兵多し。数日を費をそのひまゆ。足下よ。御歓なりゝ。発りなん。居亡びく歯牙寒し。ゝ勢及御ふ入るなり。當國ゆ歓を得ゆ。其詮さゝふなるべし。万一伊勢も御ふ入ゆ。変事蕭牆のうちゆ発らば。膽を嚙こも及ぶまじ。這程御國の態をるゆ。他國へ御馬と発さんゆ。其

危き時節なりと怪る色なく言快せり。評議既に定まりて。諸士出陣の意備。區くなる其所へ。秀吉獨り出馬を拒む。宜しからぬと言しられば。座中あらけんなくなると。柴田佐久間大よ聽て。藤吉郎が傍若無人今に敵めぬ縛なり。勢州攻を拒む條。なりての外の過言なり。快よく悄児を容られん。伊勢の容子を探り初て。今こそ実に欲取べき。時節なれば斯はのべに。軍の評義一決せり。取べき物をさらざる時は。却て天の祟あり。加之君に専。御出馬あるべき思起れ。さや某こよ準備せり。それを今更一個に。しん遠立る譴懐さよと威猛ごろに詞る。信長も怒せ給ひ。諸老臣なる予が意に随ひ。伊勢を取らんと劃る。某輩一個妨なる条。なるべきなりと

不當なる。世益の詞を費さる。荐び出馬を拒まるべ。その分に留きなる。目前稱なる。輝起よと敦圍く下知しられば。柴田と叔木下と平生憎を在なりし非事。よくなるに追出ぬ。明日いなく勢列へ。発んと徇られて。其準備をせる。上総必夜に入る。悄よ藤吉郎を召出され。閑所に容く問せ給へ。汝今日出馬を止め。且足下に危き事のあるとりに。せし其詞材と。信長更に心を知を。明白に聞を聴せよと。訊給へば藤吉郎。畏伏て言快しるる。伊勢攻の事なりて。君の御諚に得ぬ。隙間なくば小臣熟く考るに。當國いまだ平均なるを。君の威光の盛なれば。暫く治殖ととのへる。君まだ用も在なれば。必定國に変起らん。其足下の危き

君臣如意
伊勢攻を
轉じて
岩倉山ゐ
向ふ
ことを
密ゐ
訴ふ

豊臣記初編巻之五
廿三

事とて。さて須山口左馬助戸部新左エ門を討てよせ。いかもかーしく其失を贖果せ。抜群の働しく。今川義元の疑心をとる。駿府の首尾を緒ちん。と心懸る時節なれば。君勢征と聞りのみ〜ば忽駿府へ内通しく。変をなせとて業の内なり。其のみ〜ば防禦を立んず。継ひて謀叛の色見るれば。岩倉山の城をこる。津田伊勢守信昌（岩倉の尾州丹羽郡より清洲の東北三里ばかり津田信昌は父の臣家信秀の弟信光の次男なれども信行と一味して信長と敵人也）儕。鳴海笠寺と一致しく。御敵とありい此儕の兵悲車他御を窺ひ。二方三方より発起ば。実に諱くしく御大事なり。如ど伊勢攻を止てまひ。まず岩倉の御退治こそ。然るべくいなれ。とりふーー速なる上総助。実理の諫なせ。然はあれども既今日。勢州攻の評定なり。明日出陣と徇られば。諸士悉く準備しく。今量いそ

そや那這と一番螺を鳴らやるーん。然ある晌ハ彼こーーく出陣の事を止めなーー。大将の命令ハ。一遭遇ーば後日はさて用ざる愁もあーん。這義をいなせなれば。と聞て秀吉笑て言さく。これ夢ひの方僅なり。這まく出馬まーく。佐屋川をく赤出まひ。彼処ふ御馬をこさせ。惣軍勢を待合せ、容子を見せく勢揃なー。引返しく岩倉へ。嚮せ参りのみ〜ば彼城中の輩ハ。只伊勢攻とのを聞て。由所ある緯必然なせ。その不意をなく殿せ参て。勝利を得ること最易ーん。岩倉落城ーるまーーば。丹羽の郡ハ悉く。御ふ属ーーのふ成べー。丹羽の郡鳴海の彼方。歎ふ属なる城ーも。破竹の如く降系せん謀ハ密なるをーーよーーとなれば。老臣遂ハ這のことを。

御出馬の后途中おかひて。命听られもうるべしと言せ下信長感ゝ歎ひ。呼かゝ[illegible]此計畧且某輩ハ今もそゝ[illegible]缺籍の態ゝ[illegible]在事の容子を見るべしと命せ下秀吉謨拜いろふも缺籍の小臣を佻こゝ御叙あらハ。他の戒もいかゝ[illegible]ん。明日御馬を岩倉へ向ちせ面ふ其眴ゝ。御陣中へ推参ゝし。柴田をもつて勧解容まんと情く泡ふ謀ゝを謀合せ夜の深るころ退出宣ふる君臣水魚の如く大功を遂る眴いるハ。天運然らしむるとの人ども。不思議ゝをけるに偶ゝり

繪本豊臣勲功記初編卷之五了